

金玉均の政治亡命と日本

大畑 篤 四 郎

一 政治的背景——明治前期日鮮関係の一断面

明治一七年（一八八四）の朝鮮における甲申政変につづく、朝鮮独立党の志士金玉均らの日本への亡命は、日本が外国からの政治亡命者を受け入れた最初の事例といつてよいであろう。しかし「受け入れた」といっても、実際には少なからぬ問題があり、後に見るように金玉均に対する日本政府の処遇は、当初こそ引渡しに応じなかったが、一般的にはきわめて冷淡なものがあつた。その後も、若干の曲折はあるとしても、日本政府は外国の政治亡命者を受け入れない立場を原則として維持し、今日に至っている。のみならずこの事件には、日本の東アジアに対する政策、態度がどのようなものであつたか、その性質の一端が如実に示されているように思われる。

本稿はこのような観点から金玉均事件を考察しようとするものであるが、前記後者の問題意識から、ここではまず金玉均事件の背景をなす明治前期の日鮮関係、そのなかでの金玉均の日本との出あいと成長、について概括的にとら

えておくこととしたい。

明治新国家が国内において諸改革と殖産興業政策（産業化『Industrialization』政策）を推進しようとする過程で、対外政策上の課題としては、西欧諸国との間の不平等条約の改正——条約改正交渉と、アジア政策としてはまず朝鮮政策が基本的な課題として取上げられ、推進されるようになるのである。しかも、朝鮮に対しては、早くも明治五—六年に征韓論が唱えられ、雲揚号事件（明治八）とその後の対鮮強圧外交——この交渉に臨み日本は軍艦六隻を朝鮮に送り、日本全権は更に陸軍増派を要請する、といった砲艦外交をとった——によって、明治九年（一八七六）二月二六日には、日本の提案を基礎として日鮮修好条規を締結せしめた。この条約は朝鮮の自主独立を認めて、朝鮮に対する清国の宗主権を否定するとともに、日鮮間の平等を掲げながら日本は片務的領事裁判権、開港場における居留地設定と日本人の土地・家屋の賃借・造営権の取得、および通商における事実上の内国民待遇、等の諸特権を獲得した。したがって日鮮修好条規は日本側が優位に立つ不平等条約であり、日本は西欧諸国との間の不平等条約改正交渉がその緒についていない時期に、隣邦の朝鮮に対しては、そのような不平等条約を締結した事実にまず注目される。

日本が列国にさきがけて朝鮮開国の先鞭をつけたことは——朝鮮が日本との条約にひきつづいて欧米諸国との間に修好通商条約を結んだのは明治一五年以降である——その後の対鮮関係における日本の立場を有利にした。経済的には、日本は朝鮮の貿易市場において独占的な地位を（暫くの間）確保し、そうした地位に乗じて屢々投機的な、さらには収奪的ともいえるような取引さえもみられるのであるが、本稿の主題にも関連し、その後の日鮮関係に重要な意義をもつものは、日本の朝鮮に対する政治的な影響力の増大であった。具体的には、日本の影響力や指導を受け入

れ、そのもとで朝鮮自体の近代的な改革を進め、清国の宗主権から脱却しようとする勢力を朝鮮に生み出すこととなり、金玉均こそはそのような代表的な人物であった。

幼にして英明のきこえ高く、二二才の時科挙（文科）の考試に合格して官途についた金玉均は、旧弊にして閉鎖的な朝鮮官界にあつて、早くから新知識を吸収して眼を世界に向け、また支配的であつた儒教倫理に対して仏教に関心を寄せてこれを奉じ、開明的な知識人として知られるようになった。やがて彼は僧李東仁を識つたが、李東仁は、花房（義質）公使一行の通訳にして本願寺僧たる楓玄哲より、日本仏教を学び、彼（および公使館員）を通じ日本の実状を学んだという。⁽³⁾金玉均は李東仁に日本留学の旅費・学費を調達してこれに与え、李東仁は明治一三年秋に訪日して、東本願寺釜山別院の紹介により京都の東本願寺に寄寓し、その紹介で東京三田の福沢諭吉を識り、日本の実状を詳しく見聞し、帰朝後金玉均に報告した。⁽⁴⁾これに刺戟されて、明治一四年七月には魚允中、洪英植等一行の訪日となり、さらにこの年一二月には金玉均、徐光範が王命をうけて訪日することとなった。

金玉均は九州各地をへて京都東本願寺に到着き、渥美契縁師よりその報をうけた福沢は、その薰陶下にある僧寺田福寿を京都に派遣して金を東京まで同道せしめた。こうして金玉均は福沢諭吉と識り、福沢の薰陶をうけ（当時慶応義塾には他に数名の朝鮮からの留学生が学んでいた）、また福沢の紹介により日本の各界の人士と交際して日本への認識を深め、日本の力をかりて朝鮮の改革をはかることを決意するようになったのである。

福沢は「時事小言」（明治一四年）において、西欧諸国の東洋進出を火災の蔓延に、これをうける東洋諸国、特に中国、朝鮮等を木造家屋にたとえ、日本は武力をもつてもこれを防ぎ、文をもつてこれら諸国を誘導して文明国

の地位に導くことが、彼を救い、自己(日本)のためにもなる方策であると主張した。⁽⁵⁾ 明治一五年には彼の主宰する「時事新報」に「朝鮮の交際を論ず」の一文を発表し(三月一日)、積極的な対鮮(華)指導を行なうべきことを強調している。⁽⁶⁾ そこでは福沢は「日本は朝鮮と相対すれば、日本は強大にして朝鮮は小弱なり。日本は既に文明に進て、朝鮮は尚未開なり」という認識のもとに、日本の朝鮮に対する指導性を強調して、「彼の国勢果して未開ならば〔日本が筆者〕之を誘ふて之を導く可し、彼の人民果して頑陋ならば之に諭して之に説く可し」「方今西洋諸国の文明は日に進歩して、其文明の進歩と共に兵備も亦日に増進し、其兵備の増進と共に吞併の慾心も亦日に増進するは自然の勢にして、其慾を逞ふするの地は亜細亜の東方に在るや明なり。此時に當て亜細亞洲中、協心同力、以て西洋人の侵凌を防がんとして、何れの国かよく其魁を為して其盟主たる可きや。……亜細亞洲に於て此首魁盟主に任ずる者は我日本なりと云はざるを得ず。」「輔車相依り唇齒相助くと云ふと雖ども、今の支那なり、又朝鮮なり、我日本の為によく其輔たり唇たるの実功を呈すべきや。我輩の所見にては萬これを保證するを得ず。……西人東に迫るの勢は火の蔓延するが如し。隣家の焼亡豈恐れざる可けんや。故に我日本国が支那の形勢を憂ひ又朝鮮の国事に干渉するは、敢て事を好むに非ず、日本自国の類焼を予防するものと知る可く」と論じている。福沢は当時の知識人の中で最も朝鮮に関心を寄せ、朝鮮人を指導した者の一人であるが、この一文には彼の「脱亞論」に通ずる側面と、国権論の一面とが併存し、後者の点では、後の国権主義者―アジア主義者の觀念とも軌を一にしているように思われる。⁽⁷⁾

さて金玉均は明治一五年八月、一旦帰鮮したが、それは壬午の変(壬午軍乱)により朝鮮より本国に逃れた花房(義質)駐鮮公使が、対鮮交渉のため軍艦を従えて朝鮮に赴任した際、その軍艦に搭乗して帰国したものであった。

この花房公使の交渉の結果、濟物浦条約が締結され（明治一五・一八八二・八・三〇、他に日鮮修好条規統約を締結）、その第六条によって朴泳孝が修信大使として一〇月に来日したが、金玉均はこの一行に参加して再度日本に渡った。朴泳孝は金玉均の影響をうけ、また滞日中福沢の知遇を得て日本国内を視察し、金玉均の思想に共鳴して朝鮮の近代的な改革を進め、そのために先覚である日本の助力を得ようと決意するのであるが、金玉均は一層具体的に、改革実行のための資金工作をするに至った。彼は福沢の紹介で井上（馨）外務卿を通じ、横浜正金銀行より一七万円の借款を得るに成功し（但し濟物浦条約による対日賠償未払分の一部として五万円を差引かれ、金玉均の手に渡ったのは一二万円）、朝鮮の改革と独立（清国宗主権からの脱却）のための運動資金とすることとした。また金玉均等は改革を進めるための顧問を招聘しようとして人選を福沢に依頼し、福沢はその門下の牛場卓蔵を推薦し、井上角五郎、高橋正信を同行させることとした。⁽⁸⁾この中、井上角五郎は朝鮮で「漢城旬報」を発行し、知鮮家としてなく朝鮮にあって活躍し、甲申の変においても独立党の志士とともにクーデター計画に参加していた事情は既に知られているので、省略する。

金玉均は明治一六年初夏の頃に三度び日本に赴いた。その目的は朝鮮改革の目的を達するため、日本からさらに借款を得ることにあり、この度は国王の委任状を得てその交渉のために渡日したのであった。金はそのため三〇〇万円の借款交渉を行なったが、その意に反して日本政府の態度は冷淡であり、結局交渉は失敗した。その経緯も本稿の主題よりそれるのでここでは省略するが、この工作は後の甲申政変に通ずるものがある。すなわち井上外務卿が金の要請に全く消極的な態度をとったのに対して、後藤象二郎が積極的に協力し、後藤が自由党の板垣退助と謀り、サンク

ウィッチ（Joseph Adam Sienkiewicz）駐日フランス公使に支援をとめ、一〇〇万円の援助資金と軍艦提供について諒承させたが、この一件が後藤より伊藤―井上に漏れて、結局工作は実現しなかった。また福沢、後藤、陸奥（宗光）等は第一銀行の渋沢（栄一）の同意を得て二〇万円借款を提供しようとしたが、これも（政権工作が絡み）政府の反対によって挫折させられた。一方政府は――たまたま清仏戦争が起って清国が朝鮮問題より眼をそらされている機に乗じて――先手をうって自ら対鮮積極政策をとり、帰国中だった井上角五郎を朝鮮に派遣し、井上や島村（久）公使館書記官と金玉均等独立党の結合から、やがて甲申の変に至るのである。⁽¹⁰⁾

二 甲申政変と金玉均の日本亡命

所謂甲申の変（甲申政変）は金玉均、朴泳孝等の朝鮮独立党の志士が、一部在鮮日本人とも連携して、政権を奪取し、改革の目的を達成しようとする義挙であった。この計画に一部在鮮邦人が関与していたことから、事件と日本との関係、特に在鮮日本公使館員が関与していたことから、事件における日本政府の責任がその後問題となり、その後の日鮮・日清交渉の焦点ともなり得るが、日本側は論議が竹添公使の責任論にわたるのを避け、事件によって日本側が蒙った損害に対する賠償や朝鮮側の責任をもとめることとして、漢城条約の締結に至った。また金玉均が義挙の試み（補註）に日本の助力を得ようとしたことは、金玉均の評価にも影響を及ぼすことになる。これらは甲申政変をめぐる基本的な論点であるが、本稿では一般的にはそうした論点の指摘にとどめ、亡命との関係では後にその点の論議にも触れることとしたい。

金玉均等によるクーデターは明治一七年（一八八四）二月四日に決行された。同夜郵政局開庁披露の祝宴が開かれていた最中に、（別宮放火に失敗して）その隣家に火が放たれ、混乱に乗じて金等が国王を景祐宮に移し、李載元を領議政とする独立党一派の政府を樹立した。新政府の要職には左議政（副首相格）に洪英植、前後營使兼左捕將には朴泳孝、左右營使兼代理外務督弁右捕將には徐光範、礼曹判書には金允植が就任した。金玉均は戸曹参判に就任して、内政の改革に当ろうとした。また金、朴のもとにより国王は「日本公使来護朕」の字を認め、これが竹添公使に伝達され、竹添公使は国王保護のために駐留日本軍を出動せしめた。一方事大党一派の要請により清国軍が出動し、六日には日清両軍が衝突したが、兵力量の乏しい日本軍は敗れて（清兵一、五〇〇、日本兵二〇〇）、七日には竹添公使等は京城を逃れ、その間日本側に礮林大尉ほか兵士、居留民に多数の死傷者を出し、独立党側にも洪英植ほかの人物が殺害された。金玉均、朴泳孝等も竹添公使とともに仁川に逃れるのである。文献の示すところでは、国王還御¹¹播遷問題から一行の京城撤退に至る過程で、竹添公使の態度が消極的となつてゆくのに對する金玉均等の不満の昂ずるのが窺えるのであるが、そうした憤懣は彼等の亡命に際して極まるのである。

金玉均等独立党の志士等一行は、竹添公使等とともに一二日八日仁川に到着し、仁川駐在の小林領事の斡旋で、第一銀行出張所支配人木下清兵衛方に寄宿したが、事大党一派の新政府の外務協弁メレンドルフ（Moellendorf 穆麟德）が、外務督弁趙秉鎬とともに仁川に派遣され、金玉均等を政治犯罪人（「逆賊」）として、その身柄の引渡しを竹添公使に要求した。メレンドルフ等が仁川に到着したのは八日であり、ただちに竹添公使との交渉が行なわれているが、九日には、金玉均等を外国と結んで国を売る犯罪人であるとする五賊弾劾の上疏（「今番金玉均等五賊之窮凶極

惡、即剖判後所未開之變也、挾外勢而賣宗國、如秦檜者有之……未有如玉均等之倚敵勢而殺宰輔者、至於禁塗血流乘輿播越、然則玉均非但我東方一國之罪人也、即天下万人紀之罪人也⁽¹²⁾」が、國王によつて裁可されている。また朝鮮側使節は、逆賊と認められた者を速やかに引渡さなければ、重大な國際問題になると次のように述べて、竹添公使に引渡しをせまった。

「金玉均・朴泳孝等은朝鮮王國의逆賊이라逮捕하다 은 더이니 速히引渡하라。萬若不應하면重大한國際問題도 될 것이다。」⁽¹³⁾

この要求に対し竹添公使は、日鮮間には犯罪人引渡し条約がないので、一般國際法により金玉均等を引渡す理由がない、として引渡し要求を拒否した。⁽¹⁴⁾しかし、この時の竹添公使の態度は頗る動揺し、矛盾にみちているといわざるを得ない。金玉均等は当時仁川に碇泊中の郵船会社汽船千歳丸に乗船して日本に亡命することが予定されていたが、竹添公使は韓国側の強硬な引渡し要求に対して、漁舟をもつて島の方に逃れることを勧め、或は引渡しを認めようとした。⁽¹⁵⁾韓国側の史書にも、竹添公使が背信的な態度をとり、独立党の要人に下船を要求したが、これは彼等にとつて青天霹靂の出来事であり、彼等を毒手に引渡す死刑宣告に等しい要求であつた、と指摘している。⁽¹⁶⁾一方、竹添は駐鮮ドイツ公使の、今次政変に対する日本の行動を批判した言説に反論したばかりか、金玉均等を木箱に入れて乗船させたとの指摘に対し、答えることなく聞き流した、と伝えられているので、竹添の行動は動揺、矛盾しているとみざるを得ないように思われる。

いずれにしても、切迫した状況の中で、金玉均等が自決を決意するに至つた際に、苦渋にみちた竹添の挙動とはう

らはらに、確乎とした態度をとったのは、千歳丸の辻（勝三郎）船長であった。辻船長は、「陸上の事は我之を知らず、此の船舶の事皆我権内に在り、諸君安んじて可なり」「公等一旦此船に乗船せられた以上、公等の進退は一に我掌中に在り、公等安心せられよ」⁽¹⁸⁾として、引渡しを拒否し、「重大国際問題」をもってするメレンドルフ側の圧力に対しても、船長権限を主張して譲らず、強制捜索を行なわせなかった。⁽¹⁹⁾

こうして独立党の一行は千歳丸船底の荷物置場に、密偵の船中混入を警戒して蟄居しつつ、長崎に入港し、日本に亡命することとなった。金玉均、朴泳孝、徐載弼、徐光範、李圭完、柳赫魯、鄭蘭教、申應熙、邊樹の九名であるが、やがて一部はアメリカに渡る等して四散し、またその後の経過からも注目されるのは金玉均の事例であるので、ここでは庇護を中心として、金玉均をめぐる動向をみることにしよう。

三 日本における金玉均の処遇

福沢諭吉によれば、甲申政変の道具立てをしたのは、福沢自身だといふ。⁽²⁰⁾ここでは事件と福沢の関係を詮索するとは避けるが、亡命した金玉均等に対して、最も手厚い保護を与えたのも、福沢であった。辻船長は一行の亡命に備えて各朝鮮人に日本名を与え、⁽²¹⁾金玉均は若田周作と変名して日本に亡命することとなった。亡命といっても当初は潜行に等しく、金玉均等が東京に到着したのは一二月下旬であり、彼等はいはゆる三田の福沢邸にかくまわれた。⁽²²⁾金は竹添の態度から推して、日本政府は自分達を朝鮮政府に引渡すのではないかと憂慮したところ、福沢は「君達のやったことは、いはゆる国事犯の行為である。日本政府いかに軟弱でも、世界に対する面目上、国事犯人を他に引渡すことはし

ないであらう。仮令ひそんなことをしようとしても国内の輿論は決してこれを許さないから、一身上のことは先づ安心して、不自由ながら当分私の宅に寄寓して形勢を見てゐるのがよからう」と慰めた。⁽²³⁾

しかし、日本政府の金玉均に対してとつた態度は、そのような友好的なものではなかった。金玉均は滯日中、再び多くの人士との交友関係をもつたが、亡命後特に金玉均に接近したのは自由党左派の一派や、国権論に転じた玄洋社系の人々であつた。玄洋社社員で東京の芝弁天（町）に梁山泊をきめこんでいた者達は、甲申の変後、清国との間に天津条約を結んだ伊藤の軟弱を怒り、やがて金玉均等とも識ることとなつた。その一人、久田全は趣意書を福岡の玄洋社の先輩に送つたが、これは金等の「窮鳥懷に入るの逆境を憐」み、援助をもとめたものであつた。⁽²⁴⁾このよびかけに応じて頭山満が上京の途中神戸で金玉均に逢い、爾後頭山は熱心な金玉均の後援者になつた。⁽²⁵⁾また、さきに金が東京で借款工作をした際、後藤象二郎がフランス公使と会談した時の通訳をつとめた小林樟雄の關係から、自由党左派の大井憲太郎が金玉均と相識り、大井は金の朝鮮改革運動をたすけるために朝鮮に渡ろうとして、大阪事件を起し、明治一八年一月下旬に大井とその同志達が逮捕され、外患罪、爆発物取締罰則違反、罪人藏匿罪に問われるに至るのである。⁽²⁶⁾大井の意図は、朝鮮の改革と独立それ自体が目的ではなく、それを起爆剤として日本の政治改革をはかるのが目的であつたといわれ、⁽²⁷⁾また事破れて服役、出所後の大井は対外硬の主唱者の一人となり、やがて南方や満州で活躍し、頭山の庇護をうけるのであるが、そうした変貌の過程は、ここでは省くこととする。

金玉均周辺における大井等の動向は、たちまち治安当局の察知するところとなつた。明治一八年一月三日付大阪府知事代理より警保局長電報は、⁽²⁸⁾「旧自由黨員カ金玉均ト謀リ朝鮮政府ヲ顛覆シ再ヒ日清ノ關係ヲ生セシメ其機ニ

乗シ我政府ノ改革ニ着手セシ扨ト嘗テ取留モナキ風説アリ其後……」と大井等々の動向を伝えた。一月三〇日の井上（馨）外務卿の高平（小五郎）駐鮮臨時代理公使宛書翰⁽²⁹⁾では、「機密信第百六十七号ヲ以テ閱應植来館ニテ金玉均等我政府ニ請願シ若干之軍隊ヲ借受ケ我國ニ攻入ルヘキ計畫有之趣并ニ無頼之徒輩ヲ募集候趣流言有之付取締致呉候様懇請致候事状并ニ貴官之御應答共委細御報告之趣致了悉候然ルニ右流言之起由スル所ハ本邦ニ於テモ近來少シク其形跡ヲ露ワシ候コト有之候ニ付」内偵中のところ、この程大井等を拘引したことを伝え「且又此舉ニ関シ金玉均等カ直接若クハ間接ニ累連致居候哉否ヤノ点モ未詳候孰レニシテモ右等ノ非拳ヲ企テ候ハ兩國ノ交際上ニ関シ不容易コトニ付此際我政府ニ於テハ充分ニ注意ヲ加ヘ果シテ其證據有之ニ於テハ法律ヲ以テ処分シ其非違ヲ懲弁スヘキ真意ニ有之候間右之主実ト我政府ノ精神トハ貴官ヨリ内々金允植⁽³⁰⁾ニ御通知相成決シテ此事ニ関シテハ我政府ニ於テハ等閑ニ付セサル意ヲ御貫徹相成安心候様御申聞可被成候」と指示している。しかもなお京城では、金玉均等が、日本の無頼の徒を集め、兵威を借り、朝鮮に來襲するといふ噂がひろまり、日本政府を悩ましていた。⁽³¹⁾類似の不穩の噂乃至事例については、なお若干報告されている。⁽³²⁾

日本側は当初、金玉均引渡し要求に応じない立場をとっていた。甲申の変善後処置としての漢城条約（明治一八・一八八五・一・九）が締結された翌日、朝鮮の金宏集全権は日本の井上（馨）全権に、「乱臣」金玉均等が宮中に乱入し、大臣を殺害した廉をあげ、その引渡しを要求した。井上全権は、両国間に犯罪人引渡し条約が締結されていないこと、また彼等が国事犯であるならば一層引渡しには応じ得ない、として要求を拒否した。また漢城条約に基いて陳謝使が来日した際（三月）にも、徐相雨特使は金玉均等の引渡しを要求したが、吉田（清成）外務大輔は国事犯引渡

しを拒否し、また徐特使が金玉均を私罪人として要求しても吉田外務大輔は慎重な態度を持し、結局特使の井上外務卿宛の文書(三・一九)に対して、井上外務卿は、金玉均等の罪状について日本政府が判断し難いこと、判断し得たとしても両国間に犯罪人引渡し条約がないこと、国際法上国事犯(政治犯)を引き渡した例がないこと、をあげて正式に引渡し要求を拒否した。⁽³³⁾しかし朝鮮改革の支援を目的とした大阪事件が起り(彼等は「告朝鮮自主檄」を用意していた)、大井憲太郎等と金玉均との親交や、朝鮮における不穩の噂が取沙汰されるようになると、金玉均をめぐる動向は一層微妙なものとなった。明治一八年一二月以降、金允植督弁は「人心騷擾致候ニ付鎮定ノ道相立候様」金玉均の引渡しを、しきりにもとめるようになった。また禮曹判書閔應植、刑曹判書李鳳翼が、金玉均が江華留守李載元に宛てた書簡教通を持参し、「其内玉均ノ陰謀ヲ徵證スヘキ章句等説下シ陰謀ノ證拠如此明白ニ有之候ニ付テハ速カニ捕縛相成可相成ハ当国ヘ交付相成度云々」と要請した。⁽³⁵⁾また朝鮮東南諸島開拓使随員で、日本船万里丸の蔚陵島木材盜載事件に関与していた白春培が朝鮮で逮捕され、その供述書に金玉均の(以前の)言として「(吾輩)与日使陰謀矯召兵丁」の字があげられていたことが報告され、⁽³⁶⁾情況はますます微妙となった。

井上外相は、大阪事件との関係については「固ヨリ朝鮮政府ノ干渉スヘキ事項ニ無之彼ヲシテ我主權ヲ嘴ヲ入レシメ不問ニ置候テハ不都合ニ有之且ツ将来ノ為ニモ相成候ニ付已ニ転報我政府シタルニ右何許、匪徒幫助該犯等ノ実跡更ニ無之只大井憲太郎等陰謀ノコト有之ニ付已ニ夫々捕縛相成タリトノ意ヲ以テ御照覆相成置度候」と指示し、⁽³⁷⁾高平臨時代理公使は訓令を執行した。

また金玉均の書簡については、高平臨時代理公使が「只一己ノ心中ヲ吐露致候迄ニテ他ニ現頭所業無之以上ハ之ヲ

以テ犯跡ノ證據トスルニ足ラス」としながらも、陰謀との関連でなお法律上の適確な解釈をもとめたのに対し、井上外相は、「現頭所存見解ノ義ハ法律上ノ問題ニシテ本省ノ意見モ未タ一定致サス候ヘトモ到底金玉均之所行ハ我法律中之ヲ罰スヘキ明文無之候」と回示している。⁽³⁹⁾

なお明治一八年暮、在鮮邦人の不穩行動調査のため朝鮮に赴いた栗野（慎一郎）外務少書記官の復命書（明治一九年一月四日）によれば、金玉均引渡しについての清官袁世凱の質問に対し、栗野は私見として、普通犯罪人も交付引渡し）条約がなければ引渡さず、政治犯罪人は右条約があっても引渡さないのが国際法上の慣習である、と指摘して婉曲に引渡し拒否の意を示した。⁽⁴⁰⁾

情勢を一層複雑にしたのは、金玉均に対する刺客の横行である。金玉均に対しては朝鮮より刺客として張甲福（張殷奎）が派遣されていたが、張の活動は日本側の官憲や金がこれを探知した。つづいて池運永が密使として日本に派遣されたが、金玉均はこれを知り同志柳赫魯、申應熙、鄭蘭教とともに、池の所持する委任状その他の秘密書類を接収し、池を横浜グランドホテルに幽閉するとともに、六月一日付で井上外相に、金の一身上の安全の保護を要請した。⁽⁴¹⁾
金が提出した証拠書類によれば、池は全権斬賊大使として、国王の委任状を与えられたものであり、国交上にも影響を及ぼし得る事件であった。⁽⁴²⁾

金玉均は六月二二日、池運永を横浜輕罪裁判所検事に告訴したが、二三日沖（守固）神奈川県令は山県（有朋）内務大臣の命（二二日）により池運永を朝鮮に強制送還し、二四日、池に対する告訴は棄却された。⁽⁴³⁾一方、井上外相は六月二日、金が日本に滞在しては「始終日清朝鮮間之交誼ヲ阻礙スルノ素因ト相成候ノミナラス此度ノ如ク本邦

ノ治安ヲ妨害スル如キ始末ニモ相成候」として、金に対しても「何分之処置」を執行することとした。但しそれは「李鴻章并ニ其外之請求之如ク」金を逮捕して清国または朝鮮政府に引渡すことでも、金を誘導して清国に渡船させることでもなしに、金を国外に退去せしめることであつた。⁽⁴⁵⁾この段階になって、日本政府が外交上の難問題となるのを避けようとして、金玉均に対する態度が変化したことは、朝鮮側の文献も指摘している。⁽⁴⁶⁾

六月二日、警視總監は金玉均に口頭で国外退去の旨を伝達し、九日には、井上外相は山県内相に、横浜グラントホテルに止宿中の金玉均に書面による退去命令を執行するように要請した。⁽⁴⁷⁾山県内相は令達案の上奏裁可をうけて、一二日神奈川県令より本人に令達された。令達によれば「朝鮮国人金玉均ナル者国事犯ノ廉ヲ以テ其本国ヲ脱走シテ目下日本ニ滞留シ其我邦ニ滞留スルハ日本政府ト友誼厚情ノ関係アル現朝鮮政府ニ不快ノ感覺ヲ起サシムルノミナラス又我邦ノ治安ヲ妨害シ外交上ノ平和ヲ障碍スルノ虞アリト日本政府ニ於テ信用スルニ足ルヘキ理由ヲ有スル」ため、命令書送達の日より一五日以内に国外退去を命じ、右命令書の取消しがあるまでは再び日本領土に入らないこと、もし一五日以内に退去しない時は「必要ナル力ヲ用イ」速やかに国外に追放すること、としていた(註⁽⁴⁷⁾文書)。

しかし金玉均は国外退去の旅費がないことを理由に退去に応ぜず、⁽⁴⁸⁾横浜居留地にあるグラントホテルがフランス人の所有のためフランス領事の協力をもとめ、七月二六日に至り沖神奈川県知事は金玉均を抑留した。⁽⁴⁹⁾結局政府は退去強制をあきらめ、井上外相は「内地ヨリ隔然セル小笠原嶋ニ送置」すれば、「内国ノ治安ヲ妨害シ外交ヲ障碍スル之憂モ有之間敷ト存候」として、小笠原島への送致を山県内相に要請し、⁽⁵⁰⁾山県内相は八月五日付で沖神奈川県知事に小笠原島護送のため東京府へ金の身柄を引渡すことを命じた。⁽⁵¹⁾金の身柄は八日、東京府に移され、九日秀郷丸によって

小笠原に護送された。金は護送に当り「南海の孤島に配謫せらるゝは是れ死出の旅なり」と抵抗して、各国公使に書を送つて訴え、また「予日本政府ノ下ニ寄寓スル日淺シトセザルモ未タ罪ヲ犯シタルノ覺ヘナシ若シ日本政府予ヲ認メテ罪アルモノトスレハ何ゾ罰金ヲ科セザル罰金ハ速ニ納ムベシ焉ゾ遠島ニ流スニ及バン」と抵抗したが、いづれも空しかった。⁽⁵²⁾金玉均の動向は常に中央に報告されていたので、實質的には保護觀察に近いと思われるが、金玉均等の生活費は国によって支出された。

金玉均は小笠原の氣候風土が體質に合わず、病いを得て北海道に転送され、明治二三年より内地で生活することを認められ、明治二七年に上海に渡り、その地で洪鍾宇に暗殺されるのであるが、それらについては別に機会があれば考察することとしたい。

四 結 語

金玉均の日本亡命は、日本にとって最初の政治亡命者受入れの事例であり、亡命当初においてこそ政府は金玉均の引渡し要求を拒否していたが、やがて国内治安維持と外交上の摩擦の回避のために（實質的には後者）金玉均の庇護に消極的となり、亡命者の人權や、金玉均の政治的立場を配慮するよりも、何よりもそのような国家的立場を優先させ、寧ろ厄介払いをするもののように彼を国外に退去せしめようとし、金が退去に応じなかった後は遠島処分にも等しいような小笠原護送（のち北海道移送）を行なった。甲申政変までは親日派の金玉均に対して、積極的とはいえないまでも、比較的好意的な態度をとってきた日本政府の、金玉均に対する態度は掌を返すようであり、その後政府は

（現在まで）一貫して外国人の政治亡命者を受入れない態度をとっている。それに対して金玉均を後援する者は民間人であり、初めは福沢諭吉、後には頭山滿や宮崎滔天等の大アジア主義者と称せられる人達がこれに当った。その後も孫文、ボース等中国や東南アジアの亡命者の庇護に熱心だったのは、その系列の人々であった。

金玉均亡命事件は、日本にとつての亡命者庇護問題を考える上でのケース・スタディとしての意義をもつとともに、日本とアジア諸国との間の問題を考える上に、示唆深い問題を提起している事例といつてよいように思われる。

（1） 征韓論が単なる排外主義や対鮮膺懲論の立場から唱えられたばかりでなく、朝鮮（東アジア）への列国の進出を牽制し、対抗するという、国際政治的な視角から強く唱えられたことについては拙稿「大陸政策論の史的考察」（国際法外交雑誌 第六八巻第五・六号）六四—六五頁。

（2） 改革者としての金玉均を理解するためには、仏教徒としての金玉均を理解しなければならないといわれるが、この点は本稿の主題より離れるので、あえて省略することとする。

（3） 古筠記念会編纂「金玉均伝」上巻（昭和一九年 慶応出版社）一三二—一三三頁。

（4） 同上書一三四—一三五頁。

（5） 石河幹明「福沢諭吉伝」第三巻（昭和七年 岩波書店）二七六—七七頁。

（6） 「福沢諭吉全集」第八巻（昭和三年 岩波書店）二八一—三一頁。

（7） 福沢の朝鮮観に国権主義的な側面が認められることについては前掲「金玉均伝」二〇二—四頁、二〇八頁をも参照。

（8） 「福沢諭吉伝」二九三頁以下、福沢の「牛場君朝鮮に行く」は「福沢諭吉全集」第八巻四九七—五〇六頁。

（9） 葛生玄暉「金玉均」（大正五年）五頁。

（10） 後藤、板垣等の金玉均援助工作は、わが国でもかなり研究され、日本の果たした役割についても論争されている。前掲「金玉均」二四九頁以下、「福沢諭吉伝」三〇〇—三〇二頁、黒竜会編「東亜先覚志士記伝」上巻（昭和八年、昭和四一年原書

房より複製）六九―七二頁、平野義太郎「馬城 大井憲太郎伝」（昭和一三年、昭和四三年風媒社より複製）複製版別冊「大井憲太郎の研究」一五―一六頁（平野義太郎稿）、この間における日本の工作をめぐる山辺健太郎氏と彭沢周氏の論争については拙著「国際環境と日本外交」（昭和四一年 東出版）九三―九四頁。

(11) 「金玉均伝」三五一頁による。独立党一派による政府の閣僚（要職）名簿につき同上書三五八―六〇頁、外務省記録「明治十七年甲申朝鮮京城事変始末書」（「日本外交文書」第一七卷三五二頁以下）の記述は異なっているが、ここでは韓国震檀学会編「韓国史」最近世篇（檀紀四二九四）六三二頁の記述を標準的のものとした。要職の意味については同書六三三頁。

(12) 日付および上疏文は「金玉均伝」三九九頁による。五賊とは金玉均、朴泳孝、洪英相、徐光範、徐載弼をさす。（「韓国史」六六〇頁）

(13) 「韓国史」六六〇頁。

(14) 「金玉均伝」四〇一頁。

(15) 同上書四〇四、四〇六頁。

(16) 「韓国史」六六〇頁。

(17) 「金玉均伝」四〇三頁。

(18) 同上書四〇五、四〇六頁。

(19) 「韓国史」六六一頁。

(20) 「福沢諭吉伝」三四〇―四二頁。

(21) 「東亜先覚志士記伝」八四頁。

(22) その間の状況は「福沢諭吉伝」三四五―四六頁、「金玉均伝」四〇七―八頁。

(23) 「福沢諭吉伝」三四七頁。

(24) 「玄洋社社史」（大正六年 玄洋社々史編纂会 昭和四一年明治文献より複製）二四四―四五頁。

(25) 同上書二四六頁以下。

(26) 同上書二四五—四六頁、平野義太郎「馬城 大井憲太郎伝」八三頁以下。

(27) 同上書別冊五頁。

(28) 「日本外交文書」第一九卷五一五頁。

(29) 機密第一三一号信 同上書五一五—一七頁。

(30) 新しい事大党一派による政府の外務協弁、のち督弁。なお金允植は前述のように甲申政変後の独立党政府の礼曹判書をもつとめていた。

(31) 明治一九年一月三日高平臨時代理大使より井上外務大臣宛（日本外交文書 第一九卷 五一三—一四頁）。

(32) 明治一九年一月四日栗野外務少書記官より井上外務大臣宛「日本人潜入不穩ノ拳アリトスル京城訛伝に対し善後措置處理報告ノ件」（同上書五二一頁以下）。

(33) 拙稿「政治亡命と日本」（國際問題 第一七四号〔昭和四九年九月〕 一七一—一八頁）。

(34) 明治一八年二月二二日高平臨時代理公使報告 機密信第一八〇号（「日本外交文書」第一九卷五三六頁）。

(35) 明治一八年二月二二日高平臨時代理公使報告 機密信第一八一号（同上書五三八頁）。

(36) 明治一八年二月二九日高平臨時代理公使報告 機密信第一八六号および附屬二（同上書五四〇、五四二頁）。

(37) 明治一九年一月二〇日井上外務大臣より高平臨時代理公使宛電報 機密第四号（同上書五四四頁）。

(38) 明治一九年二月一九日高平臨時代理公使より井上外相宛電報 機密第一八号（同上書五五〇頁）。

(39) 明治一九年三月八日井上外相より高平臨時代理公使宛電報 機密 送第四八号（同上書五五一頁）。

(40) 同上書五二四頁、瀬川善信「日本外交史における亡命者問題」（國際法外交雜誌 第七四卷第二号 六一—七頁）。

(41) 張が閔応植等によつて金の暗殺を委任されていたことは「韓國史」九二九頁。

(42) 同上書九三〇頁。

(43) 日本外交文書 第一九卷 五五五頁。

(44) 同上書五六一、五五五頁参照。

(45) 明治一九年六月三日井上外相より在清塩田(三郎)公使、在鮮高平代理公使宛電報 機密 送第二七九号(「日本外文書」第一九卷五七三頁)。瀬川氏前掲論文七頁。金玉均引渡し請求の背後には清国の李鴻章があると思われるが、史料的にはなお充分実証されないので、ここでは割愛する。

(46) 「韓国史」九三三頁。

(47) 明治一九年六月九日井上外相より山県内相宛 送第二九六号(「日本外交文書」第一九卷 五七三―五頁)。

(48) 松本正純「金玉均詳伝」(明治二七年 厚生堂) 一〇五頁。

(49) 瀬川氏前掲論文八頁。抑留先は横浜市伊勢山の三井別荘であった(松本氏前掲書一〇五頁)。フランス領事との交渉は前掲「日本外交文書」第一九卷。

(50) 明治一九年八月二日井上外相より山県内相宛照会「日本外交文書」第一九卷五八二―八三頁、瀬川氏前掲論文八一―九頁。当時小笠原には年四回の便しかなかったという。

(51) 「日本外交文書」第一九卷五八三―八四頁。

(52) 松本氏前掲書一〇五頁。

(53) 小笠原島東京府出張所長立木兼善の東京府書記官銀林綱男宛報告書(明治一九年九月七日)(東京韓国研究院蔵「明治廿年中金玉均ニ関スル書類」享)。なお金玉均のほか朴泳孝、鄭蘭教、柳赫魯、申応熙が小金原島に護送された。前掲史料。

(補註) 金玉均乃至甲申政変については、外国(日本)勢力と結んだ政権運動とする見方と、挫折に終わった愛国的改革運動とする見方とが対置されると思われる。日本では山辺健太郎氏が前者の説をとっている「朝鮮改革運動と金玉均」(歴史学研究所二四七)。また北朝鮮では反封建ブルジョア改革運動と評価している(朝鮮民主主義人民共和国社会科学歴史研究所編「日本朝鮮研究所訳編「金玉均の研究」昭和四三年 日本朝鮮研究所」。ほかに梶村秀樹「朝鮮近代史と金玉均」(思想五一〇)、「韓」第三〇号(金玉均特集)の諸論文、同誌第三号所収崔書勉「金玉均研究の現代的意義」等参照。総じて金玉均の評価には、現代の観点に立ってなお追及すべき部分がすくなくないように思われる。